

ジャズの魅力伝え半世紀

草分け的クラブ「BODY & SOUL」東京

日本のジャズクラブの草分け的な存在として知られる「BODY & SOUL」(ボディ・アンド・ソウル) (東京・渋谷) が、開店から50年を迎えた。新型コロナウイルス禍で一時は経営危機に陥ったが、全国のファンからの支援で乗り切った。オーナーの関京子さん(83)は「ライブはジャズの現場。その魅力を伝える場であり続けたい」と、思いを新たにしている。

関さんがジャズに関心を持ったのは、戦後間もない頃。録音技師だった父が復員後、ラジオ番組の制作に携わり、スタジオに連れられてジャズの生演奏を聴いたのがきっかけだった。関さんは「ジャズのことは何も知らなかったけれど、その熱気に触れて、とりにこになった」と振り返る。踊りにも傾倒し、中学卒業後は松竹の歌劇団に入って活躍したが、ジャズ好きが高じて退団後の1965年、東京・新宿にジャズクラブ「タロ」を開店。無名だった日野皓正らが演奏し、親交を深めた。

「BODY & SOUL」がオープンしたのは74年。新宿にレコードでジャズを聴かせるとしてスタートしたが、六本木に移転後はピアノを設置するとセッションが日常的に行われ、ライブを再開するようになった。モダンジャズを代表するドラム奏者アート・ブレイキーが、来日公演のために店を訪れるようになったのをきっかけに、海外のミュージシャンにも店の名前が知れ渡り、数々のビッグネームがステージに立った。

一方で、国内外の新人発掘にも力を注ぎ、演奏の機会を積極的に与えてきた。世界のジャズシーンで活躍するピアニストの小曾根真さん(63)は「関さんは何十年にもわた

リハーサルの演奏に拍手を送る関京子さん(手前)と笑顔で応えるメンバー。東京都渋谷区の「BODY & SOUL」



コロナ禍もファンが支援

ってジャズ・ミュージシャンたちを育ててきました。私もその一人で、ジャズの魅力を若い音楽家に伝え続けてきてくれたことに、尊敬と感謝の気持ちでいっぱいです」と話す。

コロナ禍で客足が遠のき、売り上げも4分の1に減ったが、常連客やクラウドファンディングの力を借りて乗り切った。

21年10月からは拠点を南青山から渋谷に移し、ライブを続ける。7月からは50周年を記念したライブが不定期で行われ、9月5日には小曾根さんも演奏を披露する。

関さんは「多くの人たちに支えられてきた半世紀だった。これからも、ライブを通じてジャズの文化を守っていきたい」と話している。



開店から50年を迎えた「BODY & SOUL」前で撮影に応じる関京子さん

東京都渋谷区